

【トルコ】 『征服一四五三』とトルコ における「オスマン帝国 イメージ」の変化

澤井一彰

本稿では、二〇一二年二月一六日にトルコ共和国を含む世界一四ヶ国において一斉に公開され、その後も現在にいたるまでトルコ国内外において大きな反響を呼んでいる映画『征服一四五三』を取り上げ、トルコにおける「オスマン帝国イメージ」の変化について考察する。

近年、トルコ共和国における「オスマン帝国イメージ」は劇的に好転しつつある。しかし、そもそも日本の多くの人々にとっては、トルコにおいてはオスマン帝国に対するイメージがよいものであったという事実自体が知られ

ていないと思われる。そこで本稿では、こうした「オスマン帝国イメージ」がなぜ形成されたのかということ、トルコ共和国の建国の歴史に遡って説明し、さらにそれが近年大きく変化しつつある原因についても考察していきたい。

もとより私自身は、歴史学とくに文献史学の手法を用いてオスマン帝国史を研究している人間であり、映画評論家でもなければ人類学者でもない。そのためトルコ映画一般についての知識は、あくまで趣味と娯楽の域を出るものではないことをあらかじめお断りしておきたい。

ただ個人的には、映画も含めてトルコという国との付き合いは浅からぬものがある。私が初めてトルコの土を踏んだのは、学部生時代にトルコ語を学ぶためにイスタンブールを訪れた約一七年前に遡る。大学院に進学した後には、博士論文の史料収集のために二〇〇二年から二〇〇六年までイスタンブールに留学し、トルコの人々と交わりつつ生活する機会を得た。また、留学から帰国した後も、史料調査や学会などのために毎年のようにトルコを訪問してきた。ここでは、これまでの自らの経験を振り返りつつ、トルコ史上空前の大ヒットを記録した映画の出現と、その裏側に隠された重要な社会的変化について考えてみたい。

I トルコにおける旧来の 「オスマン帝国イメージ」

オスマン帝国からトルコ共和国へ

映画についての具体的な話を始める前に、トルコ共和国の成立過程とその「オスマン帝国イメージ」の形成との関係性について、簡単にまとめておきたい。

よく知られているように、オスマン帝国は一三〇〇年前後にアナトリア西北部に成立して以降、アジア、アフリカそれにヨーロッパの三大陸に君臨し、六二〇年以上にわたって存続した巨大な「多民族帝国」であった。そのオスマン帝国は、第一次世界大戦に敗れた後、一九二〇年に帝国領の分割を企図したセーブル条約に調印したため、アナトリアのトルコ系住民たちは自らの居住地の多くを失う危機に直面することになった。

この危機に際して、連合軍の圧力に屈したオスマン帝国の打倒とトルコ人による「国民国家」の建設を呼びかけてアンカラに新政府を樹立したのが、後に「国父（アタテュルク）」と呼ばれることになるムスタファ・ケマルであった。ムスタファ・ケマルを指導者とするトルコ人たちは祖国解放戦争を戦い抜き、一九二二年九月にはメガリ・イデア（大ギリシア主義）を掲げてアナトリアに侵攻してきた

ギリシア軍の撃退に成功する。直後の十一月にオスマン帝国最後の君主であるメフメト六世がマルタに亡命したことから、六世紀もの間続いたオスマン帝国は実質的に滅亡することとなった。

翌一九二三年七月、連合国は、改めてアンカラ政府との間にローザンヌ条約を締結し、その結果、アナトリアにはトルコ人による「国民国家」が成立することとなった。そして、同年一〇月二九日、アンカラのトルコ大国民議會は共和制を宣言し、ムスタファ・ケマルを初代大統領に選出して、トルコ共和国が正式に建国される運びとなったのである^{*)}。

トルコ共和国における「オスマン帝国イメージ」

以上のような歴史的経緯によって成立したトルコ共和国において、オスマン帝国に対する評価は必ずしも高いものとはならなかった。むしろ、建国間もないトルコ共和国を称揚し、その存在意義を高めていくためには、それ以前に存在していたオスマン帝国の、とりわけその末期の歴史を断罪し、滅亡を正当化する必要があった。

そのため、ムスタファ・ケマルの肝入りによって創設されたトルコ歴史協会を中心に、新生トルコの歴史家たちの多くは、オスマン帝国末期の数々の混乱を自ら体験してきたこともあって、オスマン帝国を近代化に失敗した「旧体

制」として描き出すことになる。^{*3}そして、とりわけ共和国初期には、オスマン帝国は打倒されるべきイスラーム的旧弊の象徴であり、それに成功して成立したのが政教分離の原則を掲げて近代化に邁進するトルコ共和国であるという理解と、そうした公定歴史観に基づいた歴史叙述とが概ね支配的となった。^{*4}

このようなトルコ共和国における「オスマン帝国イメージ」については、トルコを代表する経済史家であるメフメト・ゲンチが二〇〇〇年に出版した著書『オスマン帝国における政府と経済』の序文において、自らの若き日のオスマン帝国に対する評価がいかに厳しいものであったかをきわめて率直かつ具体的に記している。やや長くなるが、以下に引用してみたい。

「（オスマン帝国は）今日においては特段何の役に立つわけでもない、いくつかのモスクと、もはや水すら流れなくなった泉亭の他には、取り立てて何も遺さなかった。その芸術、文学、詩は、旧式であったがために、とうの昔に捨て去られ、忘れ去られた。学術、哲学、法、思想および技術についても、別段、特筆すべきものはない。オスマン帝国がつくりあげた専制的秩序、より正確に言うならば「無秩序」が終焉を迎えたことは、ただバルカン半島の諸民族のためのみなら

ず、トルコ自らにとってもまた、ひとつの救済だったのである」（Geng 2000: 16）

メフメト・ゲンチは、一九六〇年代のトルコにおけるこうしたオスマン帝国イメージに取り囲まれながらオスマン帝国史研究を志したのである。

後で述べるように、アタテュルクが立党した共和人民党に代わる民主党政権の一〇年間（一九五〇～六〇年）においては、歴史認識を含めて、それまでの急進的な諸政策への見直しと緩和が行われ、オスマン帝国に対する歴史的評価も若干好転するかに見られた時期もあった。しかしその後に行われた軍部による相次ぐクーデターは一連の変化にも歯止めをかけることとなった。言うまでもなく、トルコ国軍は伝統的に、いわゆるケマリズム（アタテュルク主義）の守護者を自他ともに任じており、それに反するような政策は共和国の「国体」を揺るがす重大事として受け止められた。そのため、そうした「反動」は軍勢力をもつてしてでも排除され、共和国の建国理念は固く守られてきたのである。

こうして、トルコ共和国の建国から八〇年以上を経過してなお、トルコにおけるオスマン帝国に対する歴史的評価は、建国当初のものと基本的にそれほど大きく変化することなく、時代は二一世紀を迎えることになる。

II 公正発展党政権の誕生

二〇〇二年一月の総選挙

筆者がトルコに留学した二〇〇二年八月から三ヶ月足らずの一月三日、トルコ共和国の政治構造の大きな転換点となった総選挙が実施された。その結果、総選挙のわずか一年前に結党されたばかりの公正発展党が三四%の得票率で三六三議席を獲得し、単独の政権与党として政治の表舞台に躍り出ることとなった。^{*5} この公正発展党は、その主要メンバーの多くがイスラーム色が濃いとされ、また、「共和国の建国理念である政教分離の原則に反する行為」によって一九九八年に憲法裁判所から解党命令が出された福祉党の出身者たちであった。^{*6}

しかし党首のレジェブ・タイイプ・エルドアンは、過去の福祉党の失敗を踏まえて、イスラーム色を前面に押し出すことは極力控えつつ、公正発展党はあくまで「保守主義」とトルコの「伝統」を重んじる政党であると表明して、中道右派勢力の結集に成功した。当初は、建国以来の構造は何も変わらないのではないかという世評も一部であったものの、同党が政権を獲得して一〇年が経過した現在から振り返って見れば、公正発展党政権の以前と以後では、あきらかに多くの事柄が少なからず変化したように感

じられる。そして、その一つがトルコ共和国における「オスマン帝国イメージ」の転換なのである。

コンスタンティノポリス陥落五五〇周年

(二〇〇三年)の状況

前述のように、六二〇年以上の長きにわたって存続し、三大陸の広大な地域を支配したオスマン帝国の歴史は、さまたまなトピックに彩られている。その中の「ハイライト」の一つは、一四五三年五月二九日のコンスタンティノポリスの陥落であろう。

オスマン帝国の時の君主メフメト二世は、難攻不落と言われた三重の大城壁に護られ、一〇〇〇年以上にわたってローマとビザンツの都として繁栄してきたこの街を征服する。一四五三年は英仏百年戦争終結の年でもあるため、コンスタンティノポリスの陥落はトルコ史あるいはオスマン史における重要な出来事であるのみならず、世界史全体においてもしばしば中世から近世への転換点として位置づけられてきた。

しかし、トルコ共和国においてこれまで五月二九日が大々的に祝われることはなかった。これは、トルコ大国民議会が開設された四月二三日（国家主権と子どもの日）、アタテュルクが救国戦争を行うべく黒海沿岸の街サムスンに上陸した五月一九日（若者とスポーツの日）、アナトリ

アに侵入したギリシア軍との決戦に勝利した八月三〇日（戦勝記念日）、あるいはトルコ共和国の建国が宣言された一〇月二九日（共和国記念日）がそれぞれ国家の祝日とされていることはきわめて対照的である。^{*7}

さらに、筆者が留学中の二〇〇三年はコンスタンティノポリスの陥落から五五〇周年にあたっていたが、オスマン帝国史を専攻する筆者の期待とは裏腹に、大規模な祝賀行事はほとんど行われず、記念シンポジウムなどの学術的行事もきわめて限定的なものにとどまった。^{*8}

しかし、これを遡ること五〇年前の一九五三年には、前述の民主党が政権を担っていた時期であったこともあって、「コンスタンティノポリス陥落五〇〇周年」はそれに祝われたようである。たとえば、この時にも『イスタンプルの征服』というタイトルの映画が製作されたほか、メフメト二世やコンスタンティノポリス陥落に関連する著作も多数出版されている。^{*9} このことは、民主党の創設者の一人であり、当時は外務大臣でもあったファト・キョプリュリユが歴史家であったことも影響していると考えられる。^{*10}

いずれにしても、コンスタンティノポリス陥落の五五〇周年にあたる二〇〇三年は、筆者の個人的な期待を裏切って、やや拍子抜けの一年に終わった。「保守主義」を掲げ、「伝統」を重んじるとする公正発展党が政権を取って

からいまだ半年足らず。トルコ共和国が、オスマン帝国の「歴史的偉業」を国家的に祝うには、やや時期尚早であったということなのかもしれない。^{*11}

Ⅲ 『征服一四五三』の制作と国内外の反応

『征服一四五三』の先触れ

緩やかな変化の兆しは、筆者が留学を終えて帰国した二〇〇六年頃から始まった。二〇〇七年には、元憲法裁判所長官で国内の世俗派を代表するアフメト・ネジデト・セゼル大統領が任期満了によって退任した。セゼル大統領は在任中、拒否権を行使することによって公正発展党が提案・可決した法案を何度も差し戻し、エルドアン首相に対峙していたことで知られる。しかし、セゼル大統領の後任が民意を問う解散総選挙の末に公正発展党の副党首であったアブドゥッラー・ギュルに決まると、二〇〇二年の政権奪取から五年が経過していた公正発展党政権は、大統領と首相とともに輩出する与党として新たな段階に入った。

こうした政治の動きと歩調を合わせるかのように、この頃からトルコ共和国における「オスマン帝国イメージ」の変化も顕著になり始める。本来二〇〇三年であるはずのコンスタンティノポリス陥落五五〇周年であるが、数年遅れの「五五〇周年記念事業」としてさまざまな出版物が刊行

されだしたのもこの頃のことである。また、当時はそれほど大きなニュースにはならなかったものの、後述するようなきわめて大規模な予算によって『征服一四五三』の制作が開始されたのが二〇〇九年四月のことであった。

なかでも二〇一一年一月に放送が開始されたテレビドラマ『壮麗なる世紀』は大ヒットし、大きな反響を呼ぶことになる。¹²一六世紀においてオスマン帝国の最盛期を現出させ、同時代のヨーロッパ人から「壮麗者スレイマン」と呼ばれたスレイマン一世の生涯を描いたこの作品は、すでに二部六三回がトルコを含む四二ヶ国において放送され、現在も第三部が制作、放送されている。こうしたオスマン帝国を題材とした歴史ドラマが登場し、それが大ヒットを記録したことは、あきらかにトルコ国内におけるオスマン帝国イメージが好転しつつあることを如実に物語るものであった。

『征服一四五三』の公開

このようななか、二〇一二年二月一六日、メフメト二世によるコンスタンティノポリスの征服を主題とする映画『征服一四五三』が満を持して公開されることになる。征服王の異名をもつメフメト二世と、コンスタンティノポリスの城壁の上に最初にオスマン軍旗を打ち立てたとされる、おそらくは後世の創作にかかる人物であろうウルバト

ル・ハサンを主人公にしたこの作品は、トルコ映画史上空前の大ヒットを記録した。

公開前から評判は上々だった。撮影に要した二四ヶ月を含めて製作期間は三四ヶ月。トルコ映画史上最大の規模となる一八二〇万ドルの予算を用いて一六〇分の大作が完成したとあって、ソーシャル・メディアに公開された三分間のデモ映像は最初の二四時間で一六七万回の再生を記録した。¹³

公開初日の二〇一二年二月一六日には、その日のうちに約三〇万人が鑑賞し、その数は一週間後には早くも二四七万人を超えた。公開一〇日目に三四三万四五三五人を記録した後も勢いは止まらず、結果として、トルコ映画としては初めて観客動員数五〇〇万人を突破し、最終的な総入場者数は六五六万五八五〇人となった。¹⁴

この映画はまた、トルコ系移民とその子孫たちが多く住むドイツ、ベルギー、オーストリア、フランス、イギリス、スイスなどヨーロッパ各国においても同時公開され、最初の週末には二五万五〇〇〇人以上の人々が鑑賞したとされる。¹⁵最終的な興行収入は三二五八万ドルに達し、後に発売されたサウンド・トラックやDVD、Blu-rayなどの販売収入も考慮すると、トルコにおける映画ビジネスとしては未曾有の大成功に終わったということができよう。

国内外における反応

上述のように、トルコ国内外において記録的な数の観客を動員し、莫大な興行収入をもたらした『征服一四五三』であるが、この映画に対する反応は必ずしも肯定的なものばかりではなかった。

まず、トルコ国内において試写会が開かれなかったこともあって、トルコ人の映画評論家の数人からは酷評を受けた。また、歴史的事件を主題とした映画にはありがちなことであるが、時代考証が不十分であるとして、アンカラ大学のウルマズ・クルトやマルマラ大学のエルハン・アフヨンジュをはじめ何人かのオスマン史研究者からも厳しく批判された。^{*16} 一方で、『征服一四五三』の時代考証についての相談役をつとめたイスタンブール大学のフェリドゥン・エメジェンは、コンスタンティノポリスが陥落した五月二九日を大学名に掲げて新設された「イスタンブール五月二九日大学」の文学部長に就任することになった。

『征服一四五三』は、ヨーロッパから中東、中央アジア、さらには東南アジアにいたる多くの国々で上映されたこともあって、国外からの反応もさまざまであった。ある程度予想されていたことであるが、ビザンツ帝国を「自国史」の重要な一部であると考えるギリシアからはもつとも辛辣な批判が寄せられた。ギリシアでは、映画が公開される前のデモ映像の段階において既に『征服一四五三』はそ

の名の通りトルコ人による「征服プロパガンダ」であるとする意見が多かったようである。^{*17}

この他、ドイツではキリスト教系の団体によって公開前からボイコットが呼びかけられた。彼らの主張は、「トルコ人はイスタンブールの征服を祝うのではなく、キリスト教徒たちに与えた被害を考えて恥じ入るべきだ」というものであった。^{*18} 同様の主張はレバノンのギリシア正教徒たちも行っており、同地では激しい抗議の末に映画は上映中止に追い込まれた。^{*19}

一方で、マケドニア、コソヴォ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ブルガリア、ルーマニア、アルバニアあるいはセルビアといった旧オスマン帝国領に位置する国々では、おおむね好意的に受け入れられたようである。^{*20}

IV 今後の「オスマン帝国イメージ」

以上のように、二〇〇二年一月の総選挙が大きなきっかけとなり、それから約一〇年を経て今も継続するさまざまな政治的、文化的変化の結果の一つとして『征服一四五三』が多くのトルコ人に受け入れられたということは、おそらく間違いないだろう。この点については、フランスの『ル・フィガロ』^{*21}、イギリスの『ガーディアン』^{*22}あるいはアメリカの『タイム』^{*23}といった新聞、雑誌もほぼ同じような

見解、論評を掲載している。

それではトルコにおいて、今後の「オスマン帝国イメージ」はどのようなものになっていくのだろうか。トルコについては、他のあらゆる事象と同様に、「オスマン帝国イメージ」についても将来の展開を予想することは容易ではない。ただ、「保守主義」と「伝統」の重視を掲げるエルドアン首相とギュル大統領が率いる公正発展党政権が継続する限り、おそらくは好転した「オスマン帝国イメージ」が簡単に元に戻ることは考えにくい。あるいは次のステップは、トルコの義務教育で用いられている歴史教科書の改変ということになるのだろうか。

いずれにしても、これまでのように、今しがた知り合ったばかりのトルコ人から「わざわざ日本からやって来て、なんでまたオスマン帝国の歴史なんか研究してるんだ?」と不躰に言われるようなことは少なくなっていくのだと思いたい。

●注

- * 1 <http://www.sabah.com.tr/Ekonomi/2012/02/18/fatih-dunyayi-fethedecek> (二〇一三年一月一〇日)。
- * 2 オスマン帝国の滅亡とトルコ共和国の成立については(新井二〇〇一)を参照。
- * 3 もちろん、オスマン帝国期から実証的な立場で歴史研究を行い、現在にいたるまで高い評価を勝ち得ている研究者も

存在している。たとえば、今もその概説書が読み継がれているイスマイル・ハック・ウズンチャルシユルや、後で言及するファト・キヨブリユリユなどはその代表であろう。この点については小笠原(二〇一〇)に詳しい。

* 4 トルコ共和国における公定歴史学とオスマン帝国に対する評価の詳細については、小笠原の二つの論文のほか、永田(二〇〇四)を参照。

* 5 トルコ共和国の総選挙には「一〇%の壁」が存在する。これは、少数政党の乱立を防ぐため、得票率が全体の一〇%に及ばない政党および候補者は落選扱いとなるという選挙規則である。そのため、大量の「死票」が発生する一方で、状況によっては、二〇〇二年の総選挙のように得票率が三四%程度でも議席の過半数を確保することが可能となる。

* 6 福祉党の活動については澤江(二〇〇五)を参照。

* 7 この他、エーゲ海沿岸の街イズミルにおいては同市がギリシア軍による占領から解放された九月九日も祝日とされており、また、同地には「九月九日大学」も存在する。

* 8 著者の記憶では、二〇〇三年五月二九日はとくに何事もなく過ぎ去っていった。イスタンブルにおいては、イスタンブル知事、イスタンブル市長およびイスタンブルを管轄する第三軍団副司令官と第五二装甲師団司令官が参加した、ごく簡単な記念行事が、一般にはほとんど周知されることなく行われたようである。イスタンブル市の記録では、式次第の中心であるメフメト二世廟への献花儀式はわずか一分で終了したことになっている。 <http://www.istanbul.gov.tr/?pid=139> (二〇一三年一月一〇日)。

*9 ただし、トルコ政府によって一九三〇年代末から準備されていた大規模な祝賀行事そのものは、隣国ギリシアに対する配慮によって直前になって中止されたという。

*10 フアト・キョプリュリュは、『オスマン朝の建国』を執筆し、オスマン帝国起源論争に大きな影響を与えた。彼自身もまた、一七世紀以降、何人もの大宰相を輩出した名門キョプリュル家の一員である。

*11 別の見方として、当時トルコはEUへの正式加盟を目指した交渉の途上にあり、キリスト教徒が多いヨーロッパ諸国、とりわけ隣国ギリシアをいたずらに刺激したくなかったという事情があったことも、二〇〇三年の時点でコンスタンティノポリス陥落五五〇周年が大規模に祝われなかった一つの原因であると考えられる。

*12 原題 Muhşem Yüzyl¹⁶。すでに二億人以上の人々によって視聴されたと言われるこのテレビドラマは、二〇一三年には合計六〇ヶ国での放送が予定されているという。配給された国の数としてはトルコのテレビドラマとして最大であり、国内のみならず、おそらく国際的にも最も成功したテレビドラマであると言える。

*13 <http://www.haberturk.com/kultur-sanat/haber/703760-fragman-bile-rekor-kirdi-galerivideo> (二〇一三年一月一日)。

*14 <http://boxofficeurkiye.com/film/2010437/Fetih-1453.htm> (二〇一三年一月一日)。

*15 『征服一四五三』のfacebookページによる。 <http://boxofficeurkiye.com/film/2010437/Fetih-1453.htm> (二〇一

三年一月一日)。

*16 ただし、アフヨンジュは前述の「壮麗なる世紀」の監修を行っており、同作品のアナクロニズムに対しても各方面からの批判は存在する。

*17 <http://www.sabah.com.tr/Yasam/2012/01/12/yunanistanda-fetih-1453-isyani> (二〇一三年一月一日)。

*18 <http://www.haberturk.com/kultur-sanat/haber/712276-fetih-1453-e-hiristiyani-boykotu-video> (二〇一三年一月一日)。

*19 <http://www.haberturk.com/medya/haber/782966-fetih-1453-yasaklandi> (二〇一三年一月一日)。

*20 <http://gundem.milliyet.com.tr/fetih-1453-e-balkan-ulkelelerinden-yogun-talep-gundem/gundemdetay/13.01.2012/148633/default.htm> (二〇一三年一月一日)。

*21 <http://www.lefigaro.fr/international/2012/02/21/01003-20120221ARTFIG00472-un-film-turc-celebre-la-prise-de-constantinople.php> (二〇一三年一月一日)。

*22 <http://www.guardian.co.uk/world/2012/apr/12/turkish-fetih-1453> (二〇一三年一月一日)。

*23 <http://world.time.com/2012/02/28/fetih-1453-blockbuster-turkish-epic-reveals-in-ottoman-past/> (二〇一三年一月一日)。

●参考文献

新井政美 (二〇〇一) 『トルコ近現代史』みすず書房。

小笠原弘幸 (二〇一〇) 『王家の由緒から国民の由緒へ——近代オスマン帝国におけるナショナル・ヒストリー形成の側面

面」歴史学研究会編『由緒の比較史』青木書店。

小笠原弘幸(二〇一一)「トルコ共和国公定歴史学における「過去」の再構成——高校用教科書『歴史』(一九三一年刊)の位置づけ」『東洋文化』九一(特集 オスマン帝国史の諸問題)、二八九—三〇九頁。

澤江史子(二〇〇五)『現代トルコの民主政治とイスラーム』ナカニシヤ出版。

永田雄三(二〇〇四)「トルコにおける「公定歴史学」の成立——「トルコ史テーゼ」分析の一視角」『植民地主義と歴史学——そのまなざしが残したもの』刀水書房。

Geng, Mehmet. (2000) *Osmanlı İmparatorluğu'nda Devlet ve Ekonomi*. Istanbul. (『オスマン帝国における政府と経済』) Köprülü, M. Fuat. (1959) *Osmanlı Devleti'nin Kuruluşu*. Ankara. (『オスマン朝の建国』)

映画リスト

『征服一四五三』……① *Fatih 1453*、② ファルク・アクソイ、③ 二〇一二年、④ トルコ共和国、⑤ トルコ語、⑥ 未公開。

著者紹介

- ①氏名……澤井一彰(さわい・かずあき)。
- ②所属・職名……東京外国語大学・ジュニアフェロー。
- ③生年・出身地……一九七六年、大阪府。
- ④専門分野・地域……オスマン帝国史、地中海世界史。
- ⑤学歴……関西大学文学部(史学地理学科)、慶應義塾大学大学院文学研究科・修士課程(史学専攻)、東京大学大学院人

文社会系研究科・博士課程(アジア文化研究専攻)。

⑥職歴……日本学術振興会特別研究員PD(三二歳、任期三年)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・ジュニアフェロー(三六歳)。

⑦現地滞在経験……トルコ(二五歳、三年八ヶ月) ほか多数。

⑧研究方法……基本的には歴史学とくに文献史学の研究方法を用いるが、留学当時は夕方五時で図書館が閉館していたため、「アフター・ファイブ」のさまざまな経験が意外と研究に役立っているように思う。

⑨所属学会……日本オリエント学会、日本中東学会、史学会、地中海学会、歴史学会。

⑩研究上の画期……留学直後に行われた二〇〇二年十一月の総選挙とその結果としての政権交代。トルコ共和国の政治史における大きな転換点となった。翌年にはイスタンブール同時多発テロの目撃者となり、自分自身が激動のトルコ現代史のただなかにいることを実感した。

⑪推薦図書……石毛直道・鈴木董『トルコ』(世界の食文化第九巻、農山漁村文化協会、二〇〇三年)。

⑫推薦する映画作品……『ゴラ』(原題『GORA』、ジィム・ユルマズ監督、二〇〇四年、トルコ)。